

書き直して、書き直して、目指すは文豪

原田 淳

1. はじめに

「この英作文を書き直して再提出せよ」と命じたら、生徒・学生はどんな反応をするだろうか。「うっぜえ」と声に出さないにしても、おそらくは不満や苛立ちを顔に出すのではないだろうか、彼らにとって書き直しとは、課題が不完全であったことに対する罰ゲームのようなものなのかもしれない。

しかし、書き直しとはもっと創造的なプロセスである。母語で書いたものでもほとんどが書き直しというプロセスを経るはずで、本稿も例外ではない。書き直しは、誤りの訂正だけでなく、文章をより読みやすく、より美しく、より読者の心に訴える形にするプロセスなのである。

このことを伝えるために、生徒・学生に示すのがインターネット上の夏目漱石やマーク・トウェインといった文豪の手書き原稿の画像である。そこからは、彼らでさえ自分の原稿に赤インクで何度も推敲を重ねた様子がかがわれる。もう一つ学習者に聞かせたいのは古典落語の題目「鼓が滝」にもなっている西行の逸話である。歌人として修行中であった西行が、鼓が滝という場所で歌を詠んだが、たまたま立ち寄った山奥の民家の老夫婦、そして孫娘にまで手直しされて歌を変えられてしまうというストーリーである。ここで手直しを素直に受け入れた西行は、その謙虚さ故、やがて後世に名を残す偉大な歌人となるのである。本稿では、書き直しという作業をこのような文学的なプロセスととらえ、意欲的に取り組ませるための工夫を提示する。

2. 物語を使って

筆者は書き直しの醍醐味を体験させるため、授業では、まずこちらから書き直しの仕方を示してみる。使用するのは「シンデレラ」などの誰でも知っている物語である。学習者が共有する背景知識を活用することで文脈の中で考えさせられる。さらに、シェ

イクスピアや芥川龍之介といった大作家も既存の物語を題材に創作をして多くの作品を残しているということも、書き直しの題材として物語を活用する理由である。

まずは下の2文から考えさせる。

Cinderella wanted to go to the party.

Cinderella had a lot of work to do.

これらはそれぞれ単独なら綴り上も文法上も何ら問題がないが、文章とするならつながり(cohesion)を意識して代名詞や接続詞を活用することになる。

→ Cinderella wanted to go to the party but she had a lot of work to do.

高校生が学習する文法項目を駆使すれば、文章に流れを持たせることができる。シンデレラが突然魔女のおばさんに背後から声をかけられる以下の場面で考えてみよう。

Cinderella was surprised. She looked back.
The strange woman was standing behind her.

この3文も文脈に沿って文章としてつながりをよくする工夫を施してみたい。まず第1文と第2文は分詞構文ですっきりさせられる。第3文は単独では問題ないが、文脈で考えると冠詞に問題がある。ここは物語に魔女のおばさんが初登場する、いわゆる起承転結の「転」の場面であり、theでなくaにしないと、彼女が既知の存在のようになってしまい、驚きが伝わらない。そこで以下のようにする。

→ Surprised, Cinderella looked back. A strange woman was standing behind her.

このように、日本人には難しい冠詞も、文脈の中で考えさせると有効である。

魔女のおばさんから馬車とドレスを与えられたシンデレラは舞踏会に急行する。以下の2文は関係副詞が有効である。

Cinderella hurried to the palace. The party was already in full swing.

→ Cinderella hurried to the palace where the party was in full swing.

さらに where の前にカンマを入れてみよう。

→ Cinderella hurried to the palace, where the party was in full swing.

こうすることによって、馬車でやっとの思いで駆け付けて会場の扉を開ければ、舞踏会はすでに宴たけなわであった、という物語の流れをシンデレラ目線で描くことができ、彼女の焦りを表現できるのではないか。

舞踏会にたどり着いたシンデレラに、人々が目を奪われる以下の場面では so that 構文も使える。

Cinderella was beautiful. Everyone wondered who she was.

→ Cinderella was so beautiful that everyone wondered who she was.

さらには、以下のような表現を使って、やや気取った文章にしてみよう。

→ Cinderella's beauty was such that everyone could not help but wonder who she was.

やや文語的であるが、beauty, such that, could not help but といった頻度の低い語彙を効果的に使うことで、状況描写が鮮やかになる。むろん普段使わない語句は使い方を間違えれば逆効果になるというリスクもある。しかしこのような冒険をすることで、学習者の受容語彙を産出語彙に変え、表現の幅を広げることができるのである。

付帯状況の with も文章のつながりをよくする効果がある。

Cinderella danced elegantly. Her long hair waved to the sound of music.

→ Cinderella danced elegantly with her long hair waving to the sound of music.

以上を応用すれば、以下の4文を1つにつなげることも可能である。なおここではシンデレラの幸福感を強調するため、happy を euphoric という非類出語に置き換えてみた。

Cinderella danced with the Prince. She was happy. She was carried away to another world. Only two of them existed there.

→ Cinderella was so euphoric dancing with the Prince that she was carried away to another world where only the two of them existed.

次に、真夜中の鐘が鳴りシンデレラが我に返る場面では、受動態と関係詞を使って書き換えてみる。

The clock struck twelve midnight. Cinderella realized that it was time to go.

→ Cinderella was brought back to reality by the sound of a clock, which struck twelve midnight.

ここはシンデレラを文頭にして彼女を中心に描き、the clock を a clock に変えて位置を後ろにずらすことによって、それまで時計が彼女の意識になかったことを伝える。さらに関係詞の前にカンマを入れることで、鐘の鳴る方を振り返ると12時であった、というシンデレラの意識の流れが描ける。

では、次の文はどうつなげたらよいであろうか。 Suddenly Cinderella pushed away the Prince and started to run. She fled down the stairs in a hurry. The prince said, "Wait!"

2文目と3文目を書き換えてみたい。まずは接続詞を使用して、「彼女が駆け下りるとき王子が叫んだ。」と表現する。シンデレラはすでに走り始めているので、時制は過去進行形、接続詞は when よりも as の方がよいだろう。「叫んだ」という感じを出すため said を desperately cried out に変えてみる。

→ As she was fleeing down the stairs in a hurry, the Prince desperately cried out, "Wait!"

さらには思い切り文構造を変えて、以下のようになるとどうであろうか。

→ As she was fleeing down the stairs, she heard the Prince desperately cry out, "Wait!"

ここでは主節の主語を the Prince から she に変え、知覚動詞 heard を使用した。こうすることで、読者はシンデレラから王子へと忙しく視点を動かす代わりに、あたかもテレビカメラが走るシンデレラの姿を追いかけるような形で視点を固定できるので、認知的負担が減る。さらには以下のような気取った表現で、場面の隅に追いやられた王子の悲痛さも伝わるのではないだろうか。

→ As she was fleeing down the stairs in a hurry, she heard the Prince's voice echoed through the long corridor, "Wait!"

このように物語を使って文章の流れをよくし、状況描写を鮮やかにする様々な試みを紹介した。ここ

での指導はプロダクト重視でなく、プロセス重視の指導である。したがってここで紹介したものが完成品というわけではなく、さらに書き直して発展させることも可能である。書き直して実際に質が上がっているのかについては意見が分かれるところであろう。しかし、書き直すというプロセスを通して、学習者は多様なアウトプットを体験し、表現の幅を広げることができるのである。

この指導のもう一つのねらいは、文法知識の実践的使用である。文法指導は「so 形容詞 that S V」などの形式提示だけで終わるものではない。このような書き直し学習で、分詞構文、関係詞、知覚動詞といった文法事項を、どのような場面でどのように使えばいいのかを考えるきっかけになるであろう。文脈の中で学習者は、ことばの「形式」、「意味」、「使用」の3側面から英文法をとらえられる(Larsen-Freeman & Celce-Murcia, 2016)。

3. 文学的に美しい表現に

ここまでは、教師から書き直しの方法を示す授業であったが、次は生徒・学生に書き直させる。ここで彼らに意識させるのは「文学的に美しい表現にしてみる」ということである。

彼ら自身が書いたものより、まずはこちらから与えたものを書き直させるとよいだろう。他人が書いたものを直させるのであれば罰ゲーム感覚はなくなるし、さらには同一の材料でグループワークも可能になる。この時点ではまだ文章のつながりを意識させることは控え、10語程度の短い文で考えさせてみる。「鼓が滝」の短歌のように短いものこそ、工夫次第でいろいろな可能性を探れるのである。

まずは以下の例で考えてみよう。

When he came home, he was very hungry.

文法的に何の問題もなく、従属節をもった複文で、つながりにも問題はない。ただし文学的な美しさという点で言えばやはり物足りないので、下のように書き換えてみる。

→ When he staggered home, he almost fainted with hunger.

staggered, fainted, hunger など非頻出語を使うことになるが、空腹感をダイナミックに表現できる。

いよいよ生徒・学生の番である。ありきたりの短い文をいくつか与え、班ごとに取り組み発表させ、

彼らの投票で美しさを競い合わせてみる。正解がないこと、評価対象が文法や綴りの正確さではないこと、さらにはグループで話し合えるということで、英語が苦手な学習者も意欲的に取り組めるはずである。

いろいろな文で試みたが、筆者の経験上最も盛り上がったのは以下の文である。

They kissed on the beach at night.

このようなロマンス物は若い学習者の関心を引くようで、とりわけ文学部の学生などは魂に火がついたかの如く、制限時間になっても「もう少し時間をください」などと訴えてくることもある。なお、この題材は教員学習会などで紹介し、先生方から以下のような秀作を提示していただいた。

- One lip embraced the other as the waves gently brushed against the sand. (カナダ人)
- Blessed by the moon and the waves, the shells gently closed hiding the soft shimmer of a pearl. (日本人)

それぞれ直喩と隠喩の使い方が見事である。筆者が個人的に一番気に入っているのは、日本人大学生グループによる以下の作品である。

- The two shadows on the sand became one.
- なお、このグループには映像学を専攻する学生がいた。視点が人間ではなく砂の上の影というところに、芸術家の非凡な才能を感じた。

4. 大家に挑む

次は、実際の文学作品を題材にしてみる。以下は川端康成の「雪国」(初版1937年)の有名な冒頭部分とその英訳である。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった(川端, 2003, p.7).

The train came out of the long tunnel into the snow country (Kawabata, 1996, p.3).

英訳者 Edward Seidensticker は日本文学研究の第一人者ともいえる人物で、源氏物語なども英訳して世界に紹介するほどの大家である。川端の名が世界に知られるようになったのも、本来英語になりにくい作品を見事に英訳した氏の功績によることが大きい。川端本人からの信頼も厚く、ノーベル賞授賞式には同行を依頼され基調講演の英訳もしている(川端, 2015)。

しかしこの英訳から受ける印象は、原文とはかなり異なる(平子, 1999; 坂井他, 2010)。原文では視点列車内にあり、「雪国であった」ということを主情報として伝えることで、トンネルを抜けて越後側に出ると、突然天候が変わり、あたり一面雪景色であったという驚きが伝わってくる。ところが英訳では原文にはなかった主語を *the train* とすることで、「列車がトンネルを出た」という出来事の記述になっている。そして *snow country* の冠詞が *the* になっているので視線はすでに雪国にあり、列車がトンネルから出てくる様を外から眺めているような印象となり、車中で感じる驚きが伝わらない。

このような問題を意識させたうえで、生徒・学生に原文で伝わる驚きを英語で表現するように指示を与える。英語学習者が、母語話者でしかも大家の英語を書き直すというのは恐れ多い話であるが、この無謀な企てが意欲を刺激するのか、グループで取り組ませると白熱する。これまでの優秀作品をいくつか紹介する。

- I was welcomed by a white world. (高校生)
- The scenery after the long tunnel changed from the darkness into a white world. (大学生)
- As the train came out, suddenly everything was white with snow everywhere. (日本人英語教師)
- Exiting the tunnel, my train emerged into a breathtaking snow country. (イギリス人英語教師)
- They came out of the long border tunnel into the snow country. (坂井他 2010, p. 306)

さて、文学的な美しさで大家を超えているであろうか。その判断は読者の皆さんにゆだねたい。しかし、どの作品も雪国に遭遇した驚きを表現しているのではないだろうか。

5. 終わりに

これまで書き直しをテーマとした3つの活動を紹介した。書き直しには文章の質を上げるだけでなく、様々なアウトプットを通して言語習得を促進する役割が期待できる。さらにはグループで取り組めば優れた協同学習にもなりうる。今後は、文章のつながりを意識したもっと長い文章にステップアップする

ことが課題である。

応用言語学者の Thomas Scovel は、言語習得には「臨界期」(the critical period)なるものが存在し、思春期を過ぎた学習者が母語話者のような発音を身につけるのはほぼ不可能であるが、その一方で、書くことに臨界期は存在しないと主張する。その例として Scovel は、ポーランド出身で成人してイギリスに渡り数々の名作を残した Joseph Conrad を紹介している(Scovel, 1988)。このほかにも "*Bushido*" を残した新渡戸稲造、中国出身でありながら日本語で小説を書き芥川賞に輝いた楊逸などの存在は、我々第二言語学習者に勇気を与えてくれる。書き直しは、プロセス重視の学習で、終わりなきことばの探究である。このような探究を通して、我々のクラスの中から将来の偉大な文人があらわれるかもしれない。書き直し、書き直し、目指すは文豪なのである。

参考文献

- 川端康成(2003). 『雪国』岩波文庫.
- Kawabata, Y. (1996) *Snow Country*. Translated by Edward Seidensticker. New York: Vintage Books.
- 川端康成(2015). 『美しい日本の私』角川ソフィア文庫.
- 平子義雄(1999). 『翻訳の原理：異文化をどう訳すか』大修館書店.
- Larsen-Freeman, D., & Celce-Murcia, M. (2016). *The grammar book: Form meaning and use for English teachers*. (3rd ed.). Boston, MA: Heinle Cengage Learning.
- 坂井孝彦, フランセス・フォード, デービッド・マーティン(2010). 『英語で味わう日本の文学』東京堂出版.
- Scovel, T. (1988). *Time to speak: Psycholinguistic inquiry into the critical period issues in second language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.

(獨協中学高等学校教諭 立教大学兼任講師)